発達理論の学び舎

Back Number: Vol 40

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

781. ダイナミックシステム理論と非線形ダイナミクスの学習

782. 普遍と不変

783. 今後の歩みについて

784. 連続的かつ非連続的な感情の豊潤さ

785. 新たな言葉の世界へ

786. 研究の進捗状況

787. 信念

788. 査読付き論文の執筆へ向けて

789. 英語化の波とオランダでの就労について

790. 無限の流れと発達支援における新たな視点

791. 「ある」という感覚のその先へ

792. 愛と死を通じた日々へ

793. 標準化分散解析（SDA）とトレンド除去変動解析（DFA）

794. 再帰定量化解析（RQA）と交差再帰定量化解析（CRQA）

795. 唯一の望み

796. 生命時間と幸福さ

797. 非線形的な動きに魅せられて

798. 能力の発達とエントロピー

799. 「自己組織化」から見る燃え尽き症候群と過労死の問題

800. 出版から一年が経って思うこと

781. ダイナミックシステム理論と非線形ダイナミクスの学習

先週から今日にかけて雨の日が続いている。天気予報を確認してみると、日曜日の今日から今週末にかけて天気がずっと悪いようだ。先週における嵐のような一日しかり、それらは新しい季節がやってくる変わり目を示すかのようである。

今日は午前中から、二つの書籍に絞って文献調査を続けていた。一つは、先週から再読に着手し始めた“A Dynamic Systems Approach to the Development of Cognition and Action (1994)”という書籍である。特に幼児の歩行運動の発達にダイナミックシステム理論を適用した第一人者であるエスター・セレンとリンダ・スミスが執筆したこの書籍には、本当に得るものが多くある。

彼らは通称「ブルーミントン学派」と呼ばれ、フローニンゲン大学の研究者を中心とした「フローニンゲン学派」とは異なる形で、ダイナミックシステム理論を発達研究に適用している。現在私がフローニンゲン大学で学ぶんでいる研究手法や発達思想と若干の相違はあるが、セレンとスミスが発達科学に残した功績は色褪せることがない。

この書籍を再読するのに数週間かかる見通しだったが、一日にだいたい二章ずつ読み進めることができているので、今週中には再読が完了しそうである。本書には、小難しい数式は一切記載されておらず、ダイナミックシステム理論の概念や発想の仕方の真髄を掴むには非常に良い。本書は私にとって、これまで学習してきた概念をさらに深めることに関して有益であり、さらには、抜け漏れている概念を補強する上でも有益である。この書籍が、ダイナミックシステム理論を発達研究に適用する者にとってのバイブルとして読み継がれている理由がよくわかる。

この書籍の次に取り掛かっていたのは、先日購入した“Nonlinear Time Series Analysis (2004)”である。この書籍は、完全に応用数学の非線形ダイナミクスに関する専門書である。だが、私がこの書籍を購入したのは、本書が非線形時系列分析について、難解な数式をほとんど用いることなく丁寧に説明しているためであった。確かに、必要最低限の数式が登場するのだが、それらがこちらの理解をむやみに遮ることはない。

前の学期に履修していた「複雑性と人間発達」のコースで取り上げられた、非線形ダイナミクスの概念や研究手法に関する理解をじっくりと深めるのに本書は最適である。どのような知識領域でもそう

だと思うが、その領域に関する概念や理論が丁寧に説明された基本書のようなものを繰り返し読み込むことは、当該領域の知識体系を自分の中に構築していく上で不可欠となる。本書をじっくりと繰り返し読むことによって、非線形ダイナミクスの知識体系を徐々に築き上げていきたい。2017/2/26

782. 普遍と不変

明日から始まる新たな週は、大学全体が追試週間と位置付けているものである。この週には、通常の講義が行われることはない。そのおかげで、月曜日に行われるサスキア・クネン教授とのミーティングや水曜日に行われるラルフ・コックス教授とのミーティングに向けて十分な準備をすることができる。また、他の曜日には、ある日本企業とのミーティングも入っているため、そうした準備に時間を充てるには、この追試週間は私にとってとても都合が良い。

追試に関して一つ思い出したことがある。以前、クネン先生と話をしていた時に、先生が担当する「複雑性と人間発達」のコースにおいて、受講生の半分が追試だったそうだ。米国の大学院に留学していた私にとって、修士課程や博士課程の者が追試を受けるというのは想像できないことである。おそらく、日本においても状況は米国とほぼ同じであり、大学院に所属する者が追試を受けたり、単位を落としたりすることなどあまりないと思われる。クネン先生曰く、今年は受講生のうち、15%が追試を受けることになったそうだ。

特にオランダの上位校は、教育の質を高く維持するためにも、とりわけ単位取得のハードルを上げているのだと思う。これについては、私は文句はなく、むしろ歓迎すべきことだと思っている。また、受講コースが終了するたびに、学生側からそのコースに対するフィードバックがあるのだが、その結果を見ると、学生側もシビアにフィードバックをしている。講義を担当する教授側と学生側との間に存在する適切な緊張関係が、この大学の教育の質を高いものにしているのだと思わずにはいられない。

大学院における教育の質について、私はほとんど文句はないのだが、学費に関してはなんとかならないものかと思う。もちろん、米国とオランダの一流校の大学院を比べると、確かにオランダの大学院の学費は、米国のそれの三分の一以下である。そう考えると、オランダの大学院の学費そのものは高くない。ただし、オランダ人やEU圏内の学生とEU圏外の学生においては、大学院に限ってみると、10倍ほど金額が違う。

当然ながら、母国の学生を優遇し、EU圏から優秀な学生を獲得したいという理由は理解できるが、EU圏外の学費と10倍ほど異なるというのは少しばかり気になるところだ。米国のたいていの大学院においては、留学生と米国人の学費は同じであるという平等性が保たれているという一方で、学費の金額が狂気染みたものであるという特徴がある──大学院のみならず、米国の学部における学費の高騰は以前から大きな社会問題になっている。

そのようなことを考えていると、少しばかり米国の大学院時代に関する記憶が蘇ってきた。サンフランシスコのゴールデンゲートパーク近くのスターバックでコーヒーを飲みながら、構造的発達心理学に関する論文を読んでいたあの日のことが懐かしく思い出された。あの時は、ロバート・キーガン、オットー・ラスキー、スザンヌ・クック・グロイター、ザック・スタイン、セオ・ドーソンなどの論文を熱心に読んでいた頃だった。なぜこの記憶が蘇ってきたのかは全くわからない。

ただ、あの時の私は今と変わらず、人間の発達現象の探究に没頭していたのは確かだ。あの時から自分は大きく変わったように思う一方で、やはり変わらないものというのも確かにあるようだ。普遍に向かうものがある一方で、不変のままのものがあるというのは、やはり人間発達の一つの真理なのだろう。

京都大学から来た学生が三月の初旬に日本に帰国するため、ささやかながら送別会を行うことにした。私がこの半年間の生活の中で、普遍に近づいたものと不変のままのものがあったように、彼の留学生活においても同様のことが起こっていたように思う。当日の送別会が今から楽しみだ。2017/2/26

783. 今後の歩みについて

夕方から小一時間程度の時間を使って、九月から進学する予定の「実証的教育学」のプログラムに出願するための志望動機書を作成していた。このプログラムに関しては、かなり以前から調査をし、チリ人のプログラム長にすでに連絡を取ることによって、このプログラムの中で自分の研究をさらに進めていくことができると判断していた。

私の中で、学習理論や教育心理学に関する知識を体系的に持っておきたいという思いが以前からあったのだが、それらを本格的に学ぶ機会がこれまでなく、このプログラムを通じてそれを実現させ

たい。また、現在私が携わっている実務上の理由として、このプログラムは非常に有益であると判断した。具体的には、現在従事している発達科学に基づいた成長支援コーチングや、オンラインラーニングのプロセスや成果をより実証的に探究するために、このプログラムは充実したカリキュラムとトレーニング機会を提供してくれるだろう。

それと同時に、私がこのプログラムに進学する最大の理由は、何はともあれ、フローニンゲン大学をたった一年で離れることはできないということである。この大学に在籍する数多くのすぐれた研究者から学ぶことが以前として多くあり、また、彼らといくつかの協働研究を行い、査読付き論文を何本か執筆するまでは、この大学を離れることを考えることはできない。それぐらいに、フローニンゲン大学には、研究に打ち込むための最適な環境が整っていると言える。そのような思いを胸に秘めながら、志望動機書の草稿を無事に執筆することができた。

プログラムの応募の締め切りは二ヶ月ほど先なので、しばらくこの草稿を寝かせておき、再度また加筆・修正を加えたい。その後、「創造性と組織のイノベーション」のコースで課題となっているグループワークに取り掛かった。前回のグループミーティングで次のミーティングまでに実行するタスクを洗い出し、今日はそのタスクに取り掛かっていた。

「フローニンゲン大学の研究の質と量を上げ、より創造的な研究を世に送り出すにはどうしたらいいのかを考えよ」という課題に対するレポートを書くために、今日は、ドイツ人の友人である博士課程に所属するヤニックにあれこれと大学の研究環境について質問をしていた。特に、博士課程に所属する者が、研究者としてのスキルを高めるためにどのようなトレーニングを受けており、教授陣からどのようなサポートを受けているのか、自分の研究を進めていく上での障害は何か、などについて質問をしていた。

それらの質問に対して正直に回答してもらうことを促したが、やはり肯定的な内容の回答が多かった。実際のところ、フローニンゲン大学の研究環境が整っていることは十分に承知していたため、ヤニックがそのような回答をすることは予想していたのだ。だが、それでも私が知らないような情報をヤニックは提供してくれたので、それらは非常に参考になった。研究者としてのトレーニングの充実ぶり、メンターとなる教授陣のサポート、学科間の垣根の低さ等を考えると、フローニンゲン大学で博士号を取得するという選択肢が、私の中でさらに強いものになった。

ただし、米国の大学院で博士課程を取得するという選択肢も依然として私の中に強くあるため、そのあたりは慎重に検討したいと思う。そのような検討をしていると、気付かない間に、欧米の大学院で取得する修士号の数が四つになりそうである。

発達支援に携わる実務家としての道を継続して歩むことは私にとって非常に大切であり、研究者としての道も同時に歩んでいこうと思ったのはここ数年以内のことであるから、研究者としてのキャリアは焦らず着実に築き上げていこうと思う。その一環として、九月からの「実証的教育学」のプログラムは、私にとってとても大切なものになるだろう。2017/2/26

【追記】

この日記で書かれているように、フローニンゲン大学をわずか一年で去るのではなく、合計で二年間ほど大学に在籍し、フローニンゲンの街で三年間ほど暮らすことにした。この街で生活をしていると、どこか非常に心が休まることに加え、探究がゆっくりとだが着実に進んでいくことを日々実感することができる。欧州での三年目の日々も、焦ることなく着実に自分の取り組みに邁進したいと思う。

おそらく本当に、欧米の大学院で四つ目の修士号を取得する可能性が高くなり、その後に一つ目の博士課程に進もうと思っている。今年一年間は大学院に通うことをせず、実務の方に力を注ぎたい。ちょうど三年前に日本に一年間ほど滞在していた時と同じように、今年一年間は協働プロジェクトに力を注いでいくことにしたい。ワルシャワ:2018/4/16(月)10:32

784. 連続的かつ非連続的な感情の豊潤さ

今日は夕方から、元フローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートの論文に目を通していた。数日前から取り掛かった、エスター・セレンの仕事を体系的に追っていくという試みに加え、ヴァン・ギアートの仕事を再度体系的に深く辿っておきたいという思いが日増しに高まっていた。

その一環として、先ほどヴァン・ギアートが20年以上も前に執筆した論文を読んでいた。この論文は、感情の普遍性について扱っている。この論文を読んで私が考えさせられたのは、感情が持つ連続性と非連続性についてである。私たちは基本的に、怒りの感情や楽しさの感情というように、概念的

に分類した形で感情を頭で認識する。こうした分類が可能なのは、感情が非連続的な性質を持つからである。だが、これは少し乱暴な説明かもしれない。

感情に対して名付けをする概念が、そもそも現象を切り分けるという性質を持っているため、感情が非連続性を持っているというよりも、概念によって感情が非連続的に切り分けられると言っていいのかもしれない。そのように考えると、感情が本来持つであろう連続的な性質が浮かび上がってくる。感情というのは、私たちが考えるよりもずっと多彩なものなのかもしれない。

私たちが概念によって名付けることができる以上のものが、そこに含まれているような気がしてならないのだ。これは以前どこかで言及したかもしれないが、私が米国で生活をする際に頭を悩ませていたのは、自分が感じている感情を英語の中にある適切な言葉で表現することであった。当時の私にとって、これは非常に厄介な課題であった。来る日も来る日も、今この瞬間に自分が感じてる感情を最も的確に捉えた言葉というのが見つからないのである。

自分の感情に合致する言葉を探すという作業は、延々と続く終わりのないもののように思えた。ある時ふと、大きなことに気づいた。自分の感情に合致する言葉を英語空間の中で探そうにも、それは見つかるはずもないと思ったのだ。というのも、私の人生において、例えば“graceful”や“indignant”という感情を、英語という言語空間の中で体験したことなど一度もなかったからである。

そもそもその言語空間の中で体験したことのない感情を、その言語空間の中の言葉を用いて表現することなど、到底不可能なのではないかと思ったのだ。仮に何らかの言葉で感情を表現したとしても、その感情の原体験がその言語空間の中にないのであるから、そこでは単なる概念が空中をさまよっているかのようであった。ある言語空間の中での原体験がない場合、その言語空間内の言葉を用いて感情を表現することが原理上できないのであれば、一生私は英語空間の中において、言葉を通じた感情表現ができないことになってしまうと思った。

そうした事態は、私をひどく落胆させるものであった。そのような状況の中、私はそれでも手探りで自分の感情に当てはまる言葉を探す日々を過ごした。出口の見えないトンネルを歩くようなことを愚直に続けていった結果、少しずつ光明が見え始めたのだ。母国語以外の言語を通じて、自分の感情を表現することは十分に可能であることが徐々にわかり始めたのである。

© YOHEI KATO 2018

そこから、私たちの感情には、言語を超えた普遍的な何かがあるのではないかと思うに至ったのだ。それは、人間の感情が持つ普遍性というものを身を持って体験した出来事であった。感情の普遍性に触れることを促したのは、他でもなく、感情の連続性の中に飛び込み、その中で言葉を当てはめることを継続させるという、連続的な感情を非連続化させる絶え間ない試みだった。

ソムリエでもない限り、私たちは様々なワインの味や香り、そして色を見分けることができない。感情も全く同様であり、感情が持つ多様な機微に神経を研ぎ澄ませることを継続的に実践しない限り、感情が持つ多様な差異に気づくことはできないのだ。感情は連続的なものでありながらも、それを直ちに認めてしまうと、私たちは感情が持つ微妙な差異を見逃すことになり、その真に豊かな性質を掴むことはできなくなってしまうのだと思う。感情の豊かさを掴むためには、自分の感情にふさわしい言葉を徹底的に探す試みが不可欠だろう。

感情を非連続化させるというのは、そのような試みのことを指す。感情を言葉によって非連続的なものとして掴む実践を愚直に続けた結果として、私たちは感情が持つ連続的な豊潤さに触れることができるのだろう。

書斎の空間に、サティのピアノ曲が静かに鳴り響く。内側の深くに沈み込ませることを自然と促すような、とても瞑想的な曲である。この曲がもたらす感情も、実際は様々な感情が連続的に連なった豊かな潤いを持つものに違いない。2017/2/26

785. 新たな言葉の世界へ

昨日は非常に充実した日曜日であった。当初計画していた仕事を全て完遂することができ、自分が向かう地点へ確実な一歩を刻んでいたと思う。また昨日は、いつもより多くの文章を書き留めていたように思う。書き留められた日記を読みながら、それは自己の本質の一端が通った軌跡のようなものに思えた。

むしろ、そうしたものこそを日記で残しておきたいのかもしれない。自己の最も深いところにある何かが、その日に確かに躍動していたということを書き留めておきたいのかもしれない。だが、そうした躍動が残す軌跡は、まだまだ濁りがあるように思える。それは、私がまだ真の意味で自分の固有性を獲得していないからだろう。真の意味で自己の本質に至った時、それが残す軌跡は、必ずや透過

性のあるより鮮明な色を帯びるだろう。そこに向かうべく、今日も自分の仕事を着実に前に進めたい。

昨日の夜に、感情の連続性と非連続性について少しばかり考えていたように思う。端的に述べると、感情が持つ真の豊かさを享受するには、自分がその時に感じている感情に対して、ふさわしい言葉を探す試みをする必要があるということを書き留めていたと思う。結局のところ、そうした試みは感情に対してのみならず、自分の内側で生じる思考や感覚などの全てのものに対して実践する必要があるだろう。それこそが、自分の内面を真に深めていく実践なのだと思う。

そして、そうした実践を通じて初めて、生の深い実感のようなものが得られる気がしてならない。一方で、私はさらに一歩先に進んだ実践を自らに課す必要に迫られているように思う。それは、思考・感情・感覚といったものと真摯に向き合い、適切な言葉を見つける試みを超えて、そもそも自分の言葉そのものを検証することである。自分が日々用いている全ての言葉を再検証しなければ、もはや前に進めないところまで来てしまったように思う。

どうすれば日々を静かに激しく生きることができるのかを考えた時、自らの言葉をつぶさに吟味することしか手段が残されていなかった。言葉の再検証から出発し、自分の言葉を再所有する試みが不可欠となる。言葉を検証する過程で、自分の言葉でないものは手放さなければならない。同時に、既存の自分の言葉をより深めるためにも、手放さなければならない言葉が自分の中にあるようだ。その先に、また新たな自分の言葉の世界が開けてくることを期待する。2017/2/27

786. 研究の進捗状況

今日は朝一番に、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生の研究室を訪ねた。クネン先生の支援のもとに研究を進めてきたおかげで、この半年間において、一度も研究が滞るようなことはなかった。現在取り掛かっている研究もこれから大詰めの時期に入る。今日は、先週に私が送っておいた論文の前半部分について、クネン先生からフィードバックを受けることからスタートすることにした。

日本語の文章と同様に、私の英語の文章にも、改善の余地は多分に残されており、文書を書く能力は一生涯にわたって開発していくべきものであると認識している。そもそも、文書を書く能力というのは、その個人の内面の成熟に応じて絶えず進化と深化を遂げるべきものであるから、一生涯に

わたって己の文章を磨き続けるというのは当たり前のことだと思う。私は、自分の人格の未成熟さと専門性の未成熟さを絶えず念頭に置いておく必要があるだろう。

私の文章に対するクネン先生からのフィードバックは、とても好意的なものだった。実際に、内容面を除き、表現に関して修正を加えられることは一切なかった。そのため、こちらからいくつか先生に質問を投げかけてみた。今回の研究では、若干欲張り過ぎている印象を拭い去れないが、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの中の三つの手法──状態空間分析、フラクタル尺度解析、交差再帰定量化解析──を適用することにしている。

論文の前半部分を執筆している最中、これらの研究手法を最初にどこで簡単に触れるべきか迷っていたのだ。詳しい説明に関しては、“Methods”のセクションで記述すればいいと思っていたのだが、そのセクションでいきなりそれらの手法を説明し始めると、少しばかり文章間にギャップが生じると感じていた。この点に関して、クネン先生に質問をすると、今後の方向性がより明確になった。論文の前半部分は、今回の研究で取り上げる最重要概念と理論を説明するという、幾分抽象的な内容になっている。

その後に、リサーチクエスチョンを挿入すると、抽象から具体に飛躍しすぎている感覚があった。このギャップを埋めるために、前半部分における概念や理論の説明をする時に、各々の項目の最後に、それらの概念や理論とリサーチクエスチョンと研究手法を架橋させるような説明を挿入すると良いのではないか、というフィードバックを得た。

これを行えば確かに、論文が後半部分へ移行する際の違和感を解消させることができると思った。変動性という概念を説明する箇所において、変動性とはそもそもどのような現象であり、それはこれまでの発達研究でどのようなものとして扱われていたのか、ダイナミックシステム理論を活用する近年の研究者の間では、どのように変動性が扱われているのか、変動性に関する先行研究はどのようなものがあるのか、変動性に関して、既存の研究に欠けている視点は何かについては、すでに論文の中に盛り込んでいた。

ただしそれでは、変動性が自分の研究の中でどのように扱われるかが不鮮明になってしまう。確かに、変動性を扱う重要性は何なのかについては、リサーチクエスチョンのセクションの中で簡単に触

れている。だが、こうした記述を論文の前半にも組み入れておかなければ、文章の流れが悪くなってしまう。その他にも、アトラクター状態やシンクロナイゼーションという現象は、私の論文の中で鍵を握っており、それらについても同様に、論文の前半部分の中で、自分の研究と絡めた記述を追加しておく必要があるだろう。これはすぐにでも取り掛かりたいと思う。

その次に取り上げたのは、今回の研究で焦点を当てている教師と生徒間の行動分類に関する分析についてである。私の方で独自に分析システム（コーディングシステム）と分析マニュアル（コーディングマニュアル）を作成し、それらをもとに、クネン先生にもデータに対して分析を行ってもらった。ここで行っていたことは、データに対する測定者間の信頼性を計測することである。50個の会話データに対して、分析マニュアルをもとに、お互いに分析をし、その結果を照合させるということを行った。幸いにも、分析結果がずれたのは4個だけであり、非常に高い信頼性を持つ分析システムを作ることができたと思う――後ほど、Rを用いて測定者間信頼性の数値を算出しておく必要がある。

今日のミーティングの中で、結果がずれた四つの会話データに対して意見交換をし、分析上の観点がどのようにズレていたのかを確認した。実際の論文の方法論のセクションの中で、四つのズレについて報告し、測定者間信頼性の値を示すのみならず、四つのズレの原因とそれらをどのように解決させたのかについても報告をしておく必要がある、という助言を先生から得た。今後、私がこの分析システムを活用する際にも、結果がズレた箇所をどのように解決させたのかを記載しておくことは有益だと思う。

最後に取り上げたのは、状態空間分析についてである。先週は、状態空間分析に関する優れた専門書である“State Space Grids: Depicting Dynamic Across Development (2013)”を丹念に読み込んでいた。

以前の学期に履修した「複雑性と人間発達」のコースの中で、状態空間分析を実習で扱っていたのだが、その時はすでに出来合いのデータセットに対してこの手法を適用していた。そのため、今回のように、状態空間分析のソフトウェアを活用するためのデータファイルを自分で作るというのは、私にとって初めてのことだった。

この専門書を読みながら、データファイルを作ってみたが、ソフトウェアをうまく起動させることができず、データファイルの作成に関して何らかの手違いがあるようだった。この手違いについてクネン先生に意見を求めていた。

この手法については、その他の専門家がフローニンゲン大学の心理学科に在籍しているようなので、その教授を紹介してもらった。今週か来週中にその教授とミーティングを行い、状態空間分析に関する上記の問題を解決させておきたい。それができれば、論文の“Results”と “Discussion”のセクションまで一気に書き進めることができる。2017/2/27

787. 信念

午前中のクネン先生とのミーティングの最後に、現在の研究とは直接関係のない二つのトピックについて話をしていた。一つ目は、査読付き論文についてである。正直なところ今の私は、クネン先生や他の教授と協働して、査読付き論文を世に送り出したいという気持ちを抑えることが難しい。というよりも今の私は、書くという行為に取り憑かれ、意義のある論文をとにかく大量に書き続けたいという衝動に襲われている。

毎日毎日思うのは、英語にせよ日本語にせよ、日々私が書く文章量は圧倒的に少ないということだ。自分が生み出す文章によって、自分の存在が溶解してしまうほどに文章を書きたいのだ。時間的な問題や私の知識体系の脆弱さによって、大量の文章を書くことができていないのだが、その日は必ずやってくると思っている。いや、その日が一刻も早くやってくることを望み、その日を迎えるために、私は毎日自らに修練を課しているのだと思う。

今日のクネン先生とのミーティングで改めて、自分の中にある未だ隠された熱を再度発見することができた。今の私は修練の時期にあり、辛抱の時期にある。この時期を通過することができれば、いよいよ本格的に文章を大量に生み出すことに乗り出していくことができるだろう。

査読付き論文について、非常に基本的な質問をクネン先生に投げかけてみた。一つには、自分の現在の研究内容を考慮すると、どのジャーナルに応募するのが良いのかということである。すると、クネン先生からいくつかの候補のジャーナルを教えてもらった。同時に、最近は科学者向けの閉じられたジャーナルではなく、広く一般の人がアクセスできるジャーナルが存在するという話も聞いた。

例えば、“frontiers”や “PLOS ONE”などは、オープンアクセス型の科学ジャーナルである。今後は、人間発達に関する実務家としてのみならず、研究者としての実績を残していきたいと思っているため、どのようなジャーナルに論文が掲載されるかというのは、非常に重要になる。

ジャーナルによっても格付けがあり、どのようなジャーナルに論文が掲載されるかによって、実績の重みが変わってくるのだ。だが往々にして、そうした権威のあるジャーナルに投稿される論文は、ごく少数の専門家が目を通すだけである、という問題を抱えている。

米国の大学院を卒業してから、フローニンゲン大学にやってくるまでの三年間、私は科学論文に自由にアクセスできないような不遇な時代を過ごしていた。そのため、ごく限られた専門家がアクセスするのではなく、多くの在野の研究者や実務家がアクセスできる、そのようなオープンアクセス型のジャーナルは非常に貴重な存在だと思っている。

クネン先生からも、今私が着手している研究内容は、他の分野の研究者が参考になる視点や研究手法が盛り込まれており、何よりも教育や人間発達に携わる実務家にも有益であろうから、それらのジャーナルに応募することも考慮してみると良い、と助言を得た。

科学者としての実績を積み重ねていくためには、どのようなジャーナルにどれほどの論文が採択されたかが重要になるのは確かである。実際に、それが数値として換算されることも知っている。それは企業社会における、企業価値の算定と同じように、科学者の価値というのも、そうした数値で測られるような時代にあるのだ。だが、私はそうした数値に振り回されていてはいけないと常に自分に言い聞かせている。

数値が持つ客観性によって、科学者としての自分の価値が何らかの数値として算出されるのは大いに結構であり、そしてそれは逆らうことのできない流れである。ただし、そうした数値が自分の研究態度や研究の質を左右するようであっては断じてならないと思うのだ。それらの数値は、外発的な動機を科学者にもたらす。私はなんとしてでも、外発的な動機に左右されるのではなく、あくまでも内発的な動機に基づいて今後の研究に取り組んでいきたいと思うのだ。

これは今後の研究者生活の中で、忘れてはならない信念の一つだろう。私は、人間の発達に関する研究と実務を死ぬまで行う。そうであれば、そのような外発的な動機によって動かされることがど

© YOHEI KATO 2018

れほど愚かなことか分かる。確かに、私が科学者としてのキャリアを歩もうと思ったのは、30歳になる前のことであったから、一般的に言えば遅いのかもしれない。しかし、それでも焦ってはならない。20年間ほどの文学的沈黙期の中で、絶えず内面と執筆技術を深めていたフランスの作家ポール・ヴァレリーの存在を思い出さなければならない。また、ノルウェーの移民として差別を受け、六年間もの期間にわたって学術世界から締め出された、アメリカの経済学者ソースティン・ヴェブレンの存在を思い出さなければならない。

現代は、彼らが生きていた時代とは良い意味でも悪い意味でも、随分と異なるのは承知である。企業社会において、売上高や当期純利益という数字を高めていくことを奨励する見えない働きかけがあるのと同様に、学術世界においても、数値で換算される研究者としての価値を高めていくことを促す見えない外圧があるのを知っている。

仮に時代錯誤と思われようが、そうした外圧に飲まれてはいけないのだ。外側の基準、外発的な動機が私の中に入り込めないぐらいに、自分の内側を自分自身の基準と内発的な動機で埋め尽くしたい。そのような状態を死ぬまで継続させることができたら、どれほど幸福な研究者人生だったと思うだろうか。2017/2/27

【追記】

私が大学教授の職を得ようと思わないのは、上記の日記に書かれていることと密接に関係している。大学の教授職としての地位を得るための馬鹿げた事柄には近づいてはならない。社会的な地位などいらないが、とにかく自分の望む探究活動に望むだけ従事できる毎日を私は望む。ワルシャワ：2018/4/17（火）09:52

788. 査読付き論文の執筆へ向けて

夕方の仕事がひと段落し、再び今日の午前中の出来事を振り返っていた。そういえば、サスキア・クネン先生とのミーティングの最後に話していた話題をまだ書き留めていなかったことに気づいた。それは非常に些細なことなのだが、科学論文を執筆する際に、同じデータに対して複数の論文を書くことが許容されているのかどうかを先生に確認した。というのもどこかで一度、一つのデータセットに対して論文は一つ、というようなことを聞いていたからだ。

この曖昧な記憶に対して、大きな違和感を覚えていた。なぜなら、今回の私の研究のように、データを収集するのに非常に労力がかかることは頻繁に見受けられることだと思うし、また、得られたデータが非常に価値のあるものである場合、それに対して一つの角度から一本の論文しかかけないというのは、どうも納得がいかなかったからである。

一つの学術論文は、基本的に一つのトピックに絞って書き進めて行くことになるため、そうした貴重なデータに対して一つの論文しか書くことが許されていないというのは、どうもおかしな話であると疑う自分がいたのだ。クネン先生に確認したところ、やはりその情報は誤っているとのことである。一つのデータに対して、テーマは一つに絞ることが原則であるが、同じデータに対して、異なる角度から複数の論文を執筆していくことは可能であるとのことだ。

実際に、クネン先生も、青年期のアイデンティティの発達を研究する際に、被験者から膨大な量の日記を収集し、そのデータは質と量ともに貴重なものであったがゆえに、そのデータに対して八本ほどの論文を執筆したことがあるそうだ。私の調査不足で、先生がそのような研究を過去にしているとは知らなかったが、同じデータセットに対して、異なる角度から複数の論文を執筆できるということを聞いて、少しばかり安堵感があった。

というのも、今回の自分の研究で用いるデータは質と量ともに貴重なものだと感じており、すでに自分の中にある研究テーマを考えると、最低でも三本ほどの論文が執筆できると思っていたからである。まさに、現在取り組んでいる修士論文の中で、最低でも三つの査読付き論文に展開させることができるような種があるのだ。しかし、今回は修士論文であるという都合上、三つのテーマの規模を小さくし、三つのテーマが一つのテーマに沿うように執筆を進めている。

現在取り組んでいる研究の中で、三つの解析手法を適用しているのも、実はそのような意図があるからだ。正直なところ、今手元にあるデータに対して、様々な角度から研究をしたいと思っており、今年は必然的に執筆する論文の数が増えるであろう。

三月中に修士論文をほぼ完成の形に仕上げ、クネン先生やラルフ・コックス教授に依頼をし、四月から査読付き論文の執筆に向けて新たに動き始めたいと思う。これは論文の執筆のみならず、いかなる表現活動全般に当てはまると思うが、とにかく自分の作品を形として残すことが大事だ。いつか

作品を世に出そうと思っていても、そのいつかは往々にしてやってこないのだということを改めて肝に銘じたい。新たなプログラムが開始する今年の九月を迎えるまでに、具体的な計画とともに、自分の論文を世に送り出したいと思う。2017/2/27

789. 英語化の波とオランダでの就労について

今日は、クネン先生とのミーティングの後、フローニンゲン大学の図書館で、アイルランド人の友人であるドーナの研究に協力するため、インタビューを受けた。ドーナは過去に、私と同じオランダ語のクラスを履修しており、そこで知り合った仲である。彼女は現在、言語学科の修士課程に所属しており、言語政策に関する探究を進めている。

近年、英語が普遍語になっていることは誰もが認めることだと思うが、特に学術世界においてそれは顕著である。この流れはもはや覆しようのないものとなっており、世界の大学が英語という普遍語の影響下にあると言える。

ドーナは、研究の一環として、フローニンゲン大学の英語化推進政策に関するインターンに従事しており、フローニンゲン大学の現状について私の知らない情報を持っていた。フローニンゲン大学は、オランダ語で提供されるプログラムのみならず、英語で提供されるプログラムを豊富に揃えている。実際に、私が所属している心理学科の多くのプログラムが英語で提供されている。そして、オランダの高等教育を受けたオランダ人は、英語を流暢に話すことができる。

しかし、ドーナ曰く、高い教育を受けたオランダ人でさえ、大学が英語で提供するプログラムにおいて、教授が述べていることを理解できないという不満を述べる者が多いそうだ。これは当然ながら、学生側の知識の絶対量の問題も多分にあるだろう。また、オランダ人の学生は、オランダ人の講師が話す英語を聞き取りやすいと思うのだが、他の国からやってきた外国人講師が話す英語は理解しにくいというのも理解できる。

その他にも、学生側の不満の背景には多様な要因があるだろう。それぐらい、いくら流暢に英語をしゃべれるとしても、英語を母国語としない者にとって、英語を用いて学術的な内容を理解し、そこから英語で思考を進めていくのは難しいのだということを改めて実感した。ドーナのインタビューに回答し終えた後、少しばかり雑談をしていた。特に、プログラム終了後の進路についてである。

ドーナは今のところ、フローニンゲン大学で何かしらの職を得たいとのことであった。私もここ最近考えているのは、米国の大学院に戻る前に、一年でもいいので、フローニンゲン大学で働くという選択肢である。私には日本企業との仕事もあるため、パートタイムのリサーチアシスタントの職を得ることができればとても有り難い。その期間に、さらに自分が探究を進めたい領域を開拓していき、複数の論文の執筆に取り掛かることができそうだからである。

ただし問題はビザにありそうだ、ということをドーナにも話した。すると、日本とオランダの関係上、オランダで就労許可を得るのはそれほど難しくないのではないか、という意見をもらった。確かにそうかもしれない。

プログラム終了後、フルタイムではなく、パートタイムで働くことができるのかを含め、ビザの件については大学の関係者に話を聞いておきたい。先日、中国人の友人であるシェンの自宅で夕食を共にした時、中国人が多くの国の観光ビザでさえ取得することが難しいことについて、自虐的な笑いと共にその状況を嘆いていたのを思い出した。それに比べて、ビザの取得に関して日本人はとても恵まれているということをシェンは述べていた。この恩恵に感謝すると共に、それを十分に活かしていく必要があると改めて思った。2017/2/27

790. 無限の流れと発達支援における新たな視点

ここのところ頻繁に攻撃的な夢を見る。昨夜の夢も非常に暴力的な描写が含まれていた。夢の中で自らの攻撃性が表出されるのは、権限意識の世界の中で、自分のエネルギーを未だに抑圧しているからかもしれないと思わせる。そこでふと思いついたのは、昨日も強く感じていたことなのだが、依然として私は文章を書きたいという欲求のようなものを抑圧し過ぎているということだ。

日々の生活の中で、自分の思考や情感を言葉にする実践を継続していても、量としてそれが全く足りないぐらいに、何かを表現しようとする力強い促しのようなものが自分の中に流れ続けている。この強大な促しの上流地点で、その流れに押し流されないようにたたずんでいるような自分がいるのだ。この流れに身を委ねた瞬間に、おそらく堰を切ったように何かが噴出するのではないかと思う。それは私にとって、本格的に大量の文章を書く瞬間を告げるものだと予感している。

しかし、今の私には、それをせき止めるものがあるのと同時に、巨大な促しの流れに抵抗するようなものがあるのだ。今の私は何かを待っているのだと思う。待っているものとは、流れをせき止めるものや抵抗するものを炸裂させるような、今よりも遥かに巨大な爆発的な流れが内側にやってくることである。私が安易に今の促しに身を委ねようとしないのは、おそらくそのためである。

小さな自己が生み出す諸々の抵抗や自己そのものを瓦解させるような、無限の大きさを持つ流れがやってくるまで、私は辛抱強く耐えなければならない。今の私が感じている小さな流れに安直に身を委ねることほど愚かなことはないと思うのだ。そうした無限の流れが内側に還流するその日まで、私は愚直に今の自分の仕事を続けたいと思う。昨夜の夢によって、そのようなことを考えさせられた。

今朝起床してすぐに書き残しておこうと思ったのは、昨日の午後に読み進めていたエスター・セレンとリンダ・スミスが執筆した書籍から閃いたことである。端的に述べると、とりわけ発達支援というと、人そのものに働きかける印象を与えるが、これはどうやら少しばかり誤ったイメージなのではないか、ということである。

彼らが書籍の中で示す、アトラクターの説明図を見ながら思ったのは、発達支援においては、人そのものに働きかけるのではなく、発達空間そのものに働きかけを行うことが賢明なのではないかと思ったのだ。その人そのものには一切触れずに、その人が存在している発達空間に関与することによって、結果としてその人が発達の歩みを継続させていくのである。そのようなイメージが直感的に脳裏に浮かんだ。より具体的には、私たちの存在を一つのボールと見立て、そのボールが動いていく地形が発達空間である。

例えば、地形の谷間は、発達の停滞期を表す。ボールが谷間に落ち込んでいる時、ボールそのものに働きかけ、谷間からボールを押し出すことを行うと、ボールに対して負荷がかかりすぎる。そうであれば、谷間の地形そのものを変えるような関与の道を探る方が賢明なのではないかと思うのだ。地形そのものに関与するというのが、私たちが存在する発達空間に関与するということの意味である。

© YOHEI KATO 2018

まさに昨夜見た夢と関連付ければ、私という一つのボールに手を加えるのではなく、大河の地形そのものが変容してしまうような流れを、自ら創出していくことが大事なのではないか、と思ったのだ。発達支援において人に直接触れないというのは、とても荒唐無稽に思えるかもしれないが、それはとても重要な示唆を含んでいるように思える。昨日の文献調査と夢の中での出来事から得られた洞察をもとに、今後もこの点について考えを深めていく必要があるだろう。2017/2/28

791.「ある」という感覚のその先へ

今日は午前中に、日本を代表するある企業の中で人財育成に携わっておられる方たちとオンラインミーティングをさせていただいた。一時間半ほどのミーティングだったのだが、その方たちの人財育成に関する思想や具体的な取り組みに対して、感銘を受けることや共感させていただくことが多々あり、非常に密度の濃いい時間だったように思う。そこでの体験をそのように言葉で表現した途端、こうしたことこそが、私が最も慎まなければならないことなのだと痛切に感じさせられた。そこでの体験は、「感銘」「共感」「密度の濃いい時間」という言葉で表現できる以上のものだったはずなのだ。

そこでの体験をありふれた陳腐な言葉で形作ろうとする、その誤魔化しの誘惑から一刻も早く抜け出さなければならない。このような誤魔化しを続けている以上、私はその瞬間の体験を深く捉えることも不可能であれば、その瞬間に顔を覗かせる真相を垣間見ることも不可能だと思うのだ。いずれにせよ、日本の企業社会の中に、人間発達の真髄や本質を捉えている方々がいるというのは、私にとって何よりの支えになる。そうした方々との対話は、いつも私にとって啓示的であり開示的だ。

啓発を受けた後に自己がさらに開く感覚がする。人間として生きていく中で、人との関係性を通じて啓示と開示を実感するというのは、とても重要なことのように思える。そのようなことを改めて考えさせてくれるミーティングだった。

今日は朝から天候の変動が激しい。小雨が降っているかと思ったら、急に大雨に変わり、突如として晴れ間が見えるというような天候が続いている。私は晴れ間が見えた瞬間に家を出発し、ランニングに出かけた。しばらくランニングを続けていると、突然、みぞれ混じりの激しい雨が降り始めた。小さな石粒のような雨を顔に受けたことは、生まれて初めてであった。その時、今日の一連の出来事は全て、人生の実相を提示しているものだと思ったのだ。

他者との対話、食事の摂取、歩くこと、考えること、変動の激しい天候・・・。それらの全ては、絶えず変化をし、儚く過ぎ去るものなのだが、紛れもなくそれらは共通の感覚を私の中に引き起こす。それは、私の内側の世界と外側の世界が、その瞬間に確かに「ある」という感覚に近い。あるいは、未だ明確に掴めぬ、そうした「ある」ものに触れている感覚が紛れもなくするのだ。

欧州での生活を始めて以降、こうした「ある」ものとの接触の頻度が高まっている。この感覚に触れる体験はほんの始まりでしかなく、そこに自分なりの意味と言葉を見つけることを行わなければならない。この感覚のその先に、人間として生きることの大切な何かがあるはずなのだ。2017/2/28

792. 愛と死を通じた日々へ

起床直後、窓の外の世界に意識を向けてみると、小鳥の鳴き声が聞こえてきた。それはとても小さく優しい鳴き声である。同時に、意味深長な響きでもある。一昨日のクネン先生とのミーティグの中で、もう少しで春が来そうだという話をしていた。その時にちょうど、早朝に聞こえてくる小鳥の鳴き声に対して、クネン先生も日々意識を向けていると述べていた。私も以前から、早朝に小さく鳴り響く小鳥の声に関心を持っていたので、偶然ながら先生と同じ関心を持っていることがわかった。私は、小鳥の鳴き声から自然と意味を見出し、その小鳥も何らかの意味を込めて鳴き声を発していたように思えて仕方ないことがよくある。

昨日から考えさせられていたのは、成長や発達そのものを追いかける生き方は間違っているのではないかということだ。人間は、成長や発達をするために生きているわけではない。成長や発達などよりも大切なことがあるということを思い出さなければならない。絶えず、成長や発達の先を見なければならない。そのようなことを強く思うのだ。

私たちの人生において、成長や発達よりも大切なこととは、意味を見出すことそのものなのではないか、という考えが再び強くなっている。意味を見出す過程の中で、私たちは生きることの充実感を覚えるのではないだろうか。こうした充実感は、成長や発達という現象そのものよりも遥かに重要であり、結局のところ、意味から生まれた充実感がなければ、成長や発達など起こりようがないと思うのだ。そのように考えると、日々の生活の中で意味を見出すということは、なおさら大切なことのように思えて仕方ない。

数日前に突如として、愛と死という人間が生きる上で最も重要であろう二つの主題について考える萌芽のようなものが私の内側に現れた。これは依然として萌芽に過ぎないのだが、愛と死という主題が自分の内側に突如として芽生え始めたことは驚きであった。愛と死は、決して日常から切り離してはならないものだろう。愛と死の中で、あるいは愛と死を通じて日々を生きるためには、それらに対する自分なりの意味というものが不可欠である。

これまでの私は、それらに対して何らの意味を付与することができていなかったがゆえに、日常から愛と死が切り離されてしまっていたように思う。私が最近強く意識している真善美というのは、愛と死と密接に繋がっている気がしてならない。少しずつではあるが、自分の内側で様々なものが緩やかに繋がりつつあるのを確かに感じている。私の中で、愛と死を離れた生き方は、もはや否定されるべきものになり始めている。

愛と死の中に意味を見出し、そこから再び自分の人生を歩んでいく必要がある。愛と死という現象が普遍的なものであるならば、私たちは独自の意味をそこに見出していかなければならない。これは逆説的だが、確信を持って言えることだ。愛と死に対して私たちが意味を見出すことが難しいのは、それらが普遍の極みだからである。普遍性の究極的な姿である愛と死に対して意味を見出すためには、独自の意味を紡ぎ出していくことが何よりも大切だ。

それをしなければ、私は一生かかっても、愛と死のなんたるかを知ることはないだろう。愛と死が普遍の極みであるということ、愛と死の中で日々を形作るところに辿り着くためには、徹底的なまでに個的な意味を積み重ねていく必要があるだろう。そのような気づきは、今の私にとって極めて大きな意味を持つことであった。2017/3/1

793. 標準化分散解析（SDA）とトレンド除去変動解析（DFA）

昼食を摂り終え、通り雨が過ぎ去った晴れ渡る空を私は静かに眺めながら、午前中の出来事を振り返っていた。先ほども、みぞれ混じりの雨が地面に叩きつけられていたのであるが、そうした激しさ以上の学びを得るような午前中だった。

今朝は、非線形性ダイナミクスの専門家であるラルフ・コックス教授の研究室を訪れていた。研究室に五分ほど早く到着し、ドアをノックすると、コックス教授が誰かとオランダ語で話しているのが聞こ

えた。そのため、私は研究室の前で数分ほど待つことにし、廊下の壁に貼られたコックス教授のポスタープレゼンテーションに目を通していた。するとすぐに、一人の学生がコックス教授の研究室から出てきた。

顔を見ると、「複雑性科学と人間発達」を一緒に受講していた学生だということがわかった。彼女と簡単に言葉を交わし、コックス教授の研究室に入った。コックス教授に挨拶をすると、お互いの近況を共有する際に、コックス教授は笑みを交えながら、「少しばかり疲労がある」ということを述べた。何があったのか聞いてみると、どうやらオランダ南部のカーニバルに昨日まで出かけていたらしい。

話を聞くと、コックス教授はオランダ南部のアイントホーフェンの出身だそうで、その土地には歴史の古いカーニバルがあるそうだ。それはかなり大きいカーニバルで、三日間に及ぶものらしい。カーニバルの話を少しばかりしたところで、私たちは本題に移った。まずは私の方から、自分の研究テーマとデータの形式について説明し、どのような種類の非線形ダイナミクスの研究手法を活用したいのかを簡単に紹介した。

必要最低限の情報を共有しただけで、コックス教授が私の研究内容とデータの形式を掴んでくれたので非常に楽であった。そこからは、私の方から質問を投げかけ、コックス教授がそれに回答してくれるという流れで対話が進んだ。

まず最初に私が質問をしたのは、今回の研究内容の一つの側面である、教師と学習者間の行動が、各々のどのような種類の変動性を持っているのかを分析する際に、「標準化分散解析（Standardized Dispersion Analysis）」と「トレンド除去変動解析（Detrended Fluctuation Analysis）」のどちらを用いる方が望ましいのか、自分のデータセットに対してそれらの手法をうまく適用することができるのか、などについて尋ねた。結論から述べると、どちらの手法を活用するにせよ、データを2の階乗のビンサイズに分割する都合上、最低でも256個のデータポイントが必要とのことであった。それぐらい多くのデータポイントがなければ、信頼性のある結果を得ることは難しいという説明を受けた。

残念ながら、私のデータセットにおいて、各クラスの教師と学習者の行動はそれぞれ30から50個ぐらいのデータポイントしか持たない。ただし、すべてのクラスを合算すれば、230個のデータポイント

を持つ二つの時系列データが得られるため、教師と学習者がそのコース全体を通じてどのような変動性の種類を持っているかを見ることは可能であるとのことであった。厳密には、256個のデータポイントがある方が望ましいのだが、230個でもとりあえず信頼性を担保して、変動性の傾向を分析することができるという情報を得た。また、変動性の分析に関する歴史を辿ると、最初に登場したのが標準化分散解析（SDA）だったそうだ。

しかし近年では、発達における変動性を分析する際に、トレンド除去変動解析（DFA）が主流になっているということをコックス教授から聞いた。確かに、発達現象に潜む変動性を調査する論文を見ていると、トレンド除去変動解析が用いられているものが多い。実は数日前にダウンロードした論文を眺めていると、非線形ダイナミクスの進歩によって、さらに新しい解析手法が誕生していることを目撃していた。それらの新しい手法についても理解を深めたいと思うが、まずは標準化分散解析とトレンド除去変動解析に関する理解を確固たるものにしたい。

標準化分散解析よりも、トレンド除去変動解析の方が信頼性のある手法だということを聞いたので、早速後ほど、プログラミング言語のRを用いて、トレンド除去変動解析をクラス全体のデータに対して適用してみたい。どのような種類の変動性が見られるのか、仮説通りのものか否かを含め、今から分析結果が楽しみである。2017/3/1

794. 再帰定量化解析（RQA）と交差再帰定量化解析（CRQA）

一時間ほど前に今日の午前中に関する振り返りを行った後、別の仕事に少しばかり取り掛かっていた。その仕事の最中、振り返りが足りなかったためか、先ほどのラルフ・コックス教授とのミーティングで得られた事柄に思考が巡っており、仕事が少し上の空であった。

そのため、やはりここでもう少しばかり、午前中のコックス教授とのミーティングの内容について書き留めておく必要があると思った。変動性の種類を特定するための手法である「標準化分散解析（Standardized Dispersion Analysis）」と「トレンド除去変動解析（Detrended Fluctuation Analysis）」についてコックス教授に質問をした後に、さらに助言を求めていたのは、「交差再帰定量化解析（Cross Recurrence Quantification Analysis: CRQA）」と呼ばれる手法についてである。

以前にも何度か言及しているように、交差再帰定量化解析は、二つの構造的に結びついたシステムがどの程度シンクロナイゼーションしながら運動しているかを分析する手法である。「複雑性と人間発達」のコースの中で、コックス教授がこの手法について詳しく説明してくれていたにもかかわらず、私は自分の理解をより深めるためにも、もう一度基本の部分から説明を求めた。

以前、コックス教授が述べていたように、非線形ダイナミクスに関する話をするのはとても好きだという発言を裏付けるように、非常に親切かつ丁寧に交差再帰定量化解析について説明をしてくれた。この手法は、私の研究において、教師と学習者の行動におけるシンクロナイゼーションを分析するのみならず、教師と学習者の会話の複雑性レベルにおけるシンクロナイゼーションを分析する際にも活用する予定である。そのため、私の現在の研究において、交差再帰定量化解析は非常に核となる研究手法だ。

冒頭で言及した「標準化分散解析」や「トレンド除去変動解析」とは異なり、交差再帰定量化解析はそれほど多くのデータポイントを必要とせず、手持ちの各クラスのデータセットに対して適用することができる。今回のデータは、行動分析にせよ、複雑性分析にせよ、どちらも共にカテゴリーデータだ。どちらも元々は定性的なデータであり、それに対して作成したコーディングマニュアルを適用し、定量化したものである。厳密には、教師と学習者の行動は「名義データ（nominal data）」と呼ばれ、行動に振られた数字は単にカテゴリーの区別を示すだけであり、その数値の大小が何らかの意味を持つことはない。

一方、カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論をもとに定量化された会話のスキルレベルに関するデータは、「順序データ（ordinal data）」と呼ばれる。スキルレベルの増加は、質的に異なる意味を持っており、このデータにおいては順序が意味を持つ。これら二つの特徴を持つのが、今回の私の研究データである。こうしたカテゴリーデータに対しても交差再帰定量化解析を活用することができるため、この手法はとても便利であり、なおかつ応用範囲が非常に広い。

交差再帰定量化解析の元にある「再帰定量化解析（Recurrence Quantification Analysis: QRA）」の原理からもう一度説明してもらうことによって、理解が非常に深まった。特に、解析の際に設定する「半径（radius）」の意味をよりクリアなものとすることができた。半径の設定が重要なのは、ポアンカレの回帰定理が示すように、ダイナミックシステムは状態空間の中で、全く同じ場所ではないが、あ

る地点の近郊に繰り返し戻ってくるという特徴があるからである。例えば、半径を大きくすればするほど、必然的に繰り返しポイント(recurrence point)を多く検出することができる。

しかし、半径を大きくしてしまうと、ある地点の近郊に戻ってくるはずの点以外の点までも、繰り返しポイントとして検出してしまうことになり、解析結果の信頼性を落としかねない。そのため、適切な半径を設定することが大事になるのだ。ただし、厳密な半径の値を設定することが重要なのではなく、必要な繰り返しポイントを取得できる値を設定することが大切となる。また、カテゴリーデータを用いる場合、その性質上、半径は0に設定するか、限りなくゼロに近い値を設定することが一般的である。

正直なところ、プログラム言語のRを活用すれば、交差再帰定量化解析をすぐに実行することができる。しかし、いろいろな分析項目が一挙に表示され、一つ一つの項目に対する数値結果の意味を解釈するのは、いつも専門書を手元に置きながらでなければ依然として難しい。

今日は、コックス教授の説明のおかげで、これまでの私が完全に見落としていた解釈の観点があることを発見することができた。交差再帰定量化解析をプロット図で表現すると、縦の直線、横の直線、斜めの直線が現れる場合がある。この線が現れる度合いに応じて、例えば、私の研究データで言えば、教師が学習者の行動を牽引しているのか、逆に、学習者が教師の行動を牽引しているのかなどを説明することができる。この点は非常に面白い。

今日から数日間は、「複雑性と人間発達」のコースで取り上げた論文や自学自習のために購入した専門書を引っ張り出し、「標準化分散解析」「トレンド除去変動解析」「再帰定量化解析」「交差再帰定量化解析」に関する理解をもう一度じっくりと深めたいと思う。2017/3/1

795. 唯一の望み

昨日は、時間を忘れてしまうほど自分の研究に打ち込んでいた。時間が経つのがあっという間であったと思った時に初めて、時間というものが存在していたのだと知った。

非線形ダイナミクスの専門家であるラルフ・コックス教授との午前中のミーティングの後、プログラム言語のRを用いて、「交差再帰定量化解析(CRQA)」と「トレンド除去変動解析(DFA)」という非線形

性ダイナミクスの手法を研究データに適用していた。最も時間を費やしていたのは、交差再帰定量化解析のプロット図を綺麗に描くためのプログラミングコードを書くことであったが、悪戦苦闘の末に納得のいくコードが書けた時は格別な充実感がもたらされる。

また、トレンド除去変動解析についてもRを用いて分析をしてみたところ、分析結果はすぐに算出できたのだが、ここでもやはり、研究論文に掲載するにふさわしいほどの見栄えの良いグラフを描くことに関しては改善の余地が多分に残されていた。

就寝の直前まで、最適なプログラミングコードを模索していたが、結局それを見つけることができなかった。そのため、今日の午後からは、ビジュアルとして論文の掲載にふさわしいグラフを描くためのプログラミングコードを見つける作業に取り組みたい。一方、午前中に取り組みたいことは、午後から計画しているような手を動かす作業ではなく、じっくりと研究論文を読むことである。特に、交差再帰定量化解析とトレンド除去変動解析に関する論文を丹念に読みたいと思う。

どの論文を読むかは昨夜の段階で決めており、就寝前、書斎の机に上に置かれた書見台の上に、目星の論文を複数並べておいた。交差再帰定量化解析にせよ、トレンド除去変動解析にせよ、非線形ダイナミクスの研究手法は、時系列データを解析する際に非常に有用であり、さらにはシミレーションや予測にも活用することができるため、ダイナミックシステムとしての人間発達を研究する際には不可欠な研究ツールだと思っている。

この思いは日増しに強まるばかりであり、思いの強まりとともに、それにのめり込んでいく自分がいるのを知っている。とにかく、毎日毎日願うように思っているのは、非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチを活用した研究と実務により多くの時間を捧げたいということである。これは切実な願いだと言っていいかもしれない。兎にも角にも、論文や専門書を読み、そこから得られた気づきを文章として書き留め、研究をし、研究の過程で得られた知見をわずかばかりでも発達支援の実務に還元することができたら、という思いのみに従って日々の生活を形作っていきたい。

そのような思いを持つ自分を冷静に見つめてみると、私はつくづく、人間の発達について徹底的に知りたいという一心で毎日の仕事に向き合っているのだということが分かる。正直なところ、「人間の発達現象を知りたい」という気持ちだけを頼りに、毎日を生きていると言ってもいいかもしれない。こ

の世界には無数の人間が存在している。人間の発達を知るためには、そうした無数の人間を見つめていく必要があるかのように思えるかもしれない。しかし、それは不可能である。

それが不可能であると知った時、私にできることはたった一つしかなかった。それは、私という一人の人間の発達現象を、一つの塵が入る隙間もないほどに知り尽くし、そこで得られた事柄を私という一人の人間の固有性から解放し、普遍的な知に変えていくことであった。探究の出発点は徹頭徹尾、自己に立脚したものでなければならない理由が私にはあり、その末に得られた知は徹頭徹尾、個を超えた普遍的なものでなければならない理由が私にはある。この思いを欺いて毎日を生きることなど、私には決して不可能である。

その思いに欺きながら生きる時、私は自己を通じて真に生きていないことを意味しているように思えて仕方ないのだ。人間の発達に関して得られた私的な知を公的な知に変容させていくためには、徹底して自己の発達現象に向き合い、自己そのものを変容させていく必要がある。そうした自己変容の先に、そこに到達するまでの過程で得られた知見が普遍的なものに近づいていくように思うのだ。私はこれをなす必要がある。また、これをなすことを心の底から望んでいる。

時間が止まってしまうほどに、そして、自分の内側にある個としての究極的な点以外は全て消滅してしまうほどに、この道に自分の全てを捧げたいと思う。他に何も望むことは一切ない。この道にただ自己を捧げるだけだ。それが唯一の望むことである。2017/3/2

796. 生命時間と幸福さ

今朝は朝一番に、起床直後から気になっていたことを確かめるために、書斎の机に向かうなりすぐに、昨日取り掛かっていた研究データの解析を再開させた。昨日とは少しばかり異なる手法を用いてデータを眺めてみると、その結果、非常に面白いことがわかった。具体的には、どうやら研究対象とした成人学習の現場において、レフ・ヴィゴツキーが提唱した「最近接発達領域」のような現象が見られ、さらには、教師が学習者に提供する「スキャフォールディング（足場固め）」の効果が、クラスの回を追うごとに徐々に薄れていくような現象を見つけたのである。

つまり、そこでは何が起こっていたかというと、学習者が学習項目の理解力を学習の進捗に応じて高めることによって、教師側が支援の度合いを徐々に緩めていくような現象が起こっていたのであ

る。まさに、学習の初期の段階においては、教師側が手厚いサポートを提供していたのだが、学習者の成長に応じて、そのサポートの度合いが徐々に緩まっているのを見て取ったのである。これは非常に面白いと思って、早朝から研究データと向き合っていた。今回の研究では、「最近接発達領域」や「スキャフォールディング」を取り上げることはないので、この発見事項のさらなる調査はまた次回以降の研究の中で取り組んでいきたいと思う。

その後、昼食までの時間、非線形ダイナミクスの手法に関する論文に目を通していた。特に、「トレンド除去変動解析（Detrended Fluctuation Analysis：DFA）」と、その母体である「変動解析（Fluctuation Analysis：FA）」に関する論文を読んでいた。これらは、人間発達の研究に活用されるよりも前から、自然現象が持つ変動性の分析や、株価のトレンド予測などの経済現象に応用されていた手法である。確かに、トレンド除去変動解析は、変動性の分析に関して信頼性のある研究手法だと言われているが、この論文を読む限りでは、見逃すことのできない問題を抱えていることがわかった。

研究データの種類や性質に応じて、トレンド除去変動解析よりも、より単純な変動解析の方が有用であることが見えてきたのである。ただし、この論文は非常に専門性が高く、読んでいる最中についていけない点が多々あった。そのため、現在かつ今後の自分の研究データを用いて変動性を分析する際には、トレンド除去変動解析の方が変動解析よりも望ましいのかを慎重に検討してく必要があるだろう。昨日のラルフ・コックス教授とのミーティングにおいても、彼がトレンド除去変動解析の方を推進する考えを持っていることが分かったので、トレンド除去変動解析を批判的に検証したこの論文について、コックス教授がどのような意見を持っているのかを今後伺ってみたいと思う。

昼食後からは、昨日かなりの時間を使って分析作業に打ち込んでいた「交差再帰定量化解析」と、その大元にある「再帰定量化解析」の背後にある理論を解説した論文に目を通そうと思っている。再帰定量化解析の肝は、ダイナミックシステムの挙動が見せる寄せては返す波を捉えることにあるだろう。再帰定量化解析は、その波の頻度だけではなく、波が持つ諸々の性質を明らかにしてくれる面白い手法である。どこかで言及したように、今の私には、もはや非線形ダイナミクスの手法やデータが開示する数字というものが、冷たい固形物ではなく、生きた血の通った生命体を映し出すように思えてならないのだ。

© YOHEI KATO 2018

応用数学の手法や数値データの背後には、生きた生命体が常に躍動しており、その躍動のストーリーが見えてくるのだ。こうした生の動きとストーリーを、自分の呼吸以上に近くに感じることができるがゆえに、私はこの探究にのめり込んでいるのだろう。

昨夜の夢の中で、「人間発達の探究をするために、仮に自分の寿命を差し出さなければならないとしたら、どれほどの寿命を引き換えに差し出すことができるか？」という問いを投げかけられた。私は夢の中で、迷わず「いくらでも」と答えていた。そのように回答した自分について、今の私はよく分かる。おそらく夢の中の私は、人間発達の探究をすることは、私の生命そのものを躍動させる力があり、差し出した寿命以上の生命時間を享受できると知っていたのだろう。その判断はとても正しい。

そのようなことを考えれば考えるほど、人間発達の探究に打ち込めば打ち込むほど、自分の中で言葉を喪失するような幸福さが込み上げてくる。確かに、そうした幸福感は一瞬の現象かもしれない。それでも、私の生活の中に常にそうした一瞬が存在するということを忘れてはいけないように思う。たとえどんなに過酷な状況においても、そうした瞬間は必ずやってくる。黒々とした雨雲のような気分の時にも、必ず青空が顔をのぞかせる瞬間がやってくるのだ。

書斎の窓から景色を眺めると、先ほどまでの晴天が一変してしまい、雨がまた降り始めた。だが、私の中の幸福感は決して変わらずにそこにあった。2017/3/2

797. 非線形的な動きに魅せられて

小鳥の小さな鳴き声が辺りに鳴り響いている。私にとって、小鳥の鳴き声にそっと耳をすませることは、早朝の一つの楽しみになっている。不思議なもので、今聞こえてくる鳴き声は、午後になると聞こえてこない。午前中に教授とのミーティングや講義があるときに、キャンパスを訪れる際に必ず通るノーダープラントソン公園には、いつもこの小鳥と似たような鳥たちが、小さく、それでいて非常に美しい鳴き声を辺りに響かせている。

公園を歩きながら小鳥の鳴き声を聞くことは、私の心を和らげ、何とも言えない幸福感をもたらしてくれる。小鳥の鳴き声のおかげもあり、一日のうち、早朝や午前中の時間は、常に静かな幸福感に包まれながら仕事に取り組むことができる。

昨日は、非線形ダイナミクスの研究手法に関する論文を読み、研究データにそれらを適用する作業に多くの時間を使っていたように思う。今回の研究では、プログラミング言語のRを駆使して、それらの応用数学の手法を活用しているため、一時期熱心に学習していたRの操作勘を取り戻し、そのスキルが徐々に向上している様子を見てとることができる。発達心理学の世界に足を踏み入れた当初から考えると、このようにプログラミング言語や応用数学の手法を用いて発達現象を研究している今の姿は、全く想像できないことである。

しかし、発達現象というものがそもそも非常に複雑な現象であり、発達の始点と終点を比較するような方法では発達のメカニズムもプロセスも一切解明することができないことを考慮すると、時系列データに非線形ダイナミクスの手法を適用している今の自分の姿は全くおかしなものではないと思う。発達現象のプロセスやメカニズムを明瞭にするためには、時系列データが必要であり、それを解析するためには特殊な手法が必要になる。今の私が特に理解を深めようとしているのは、そうした特殊な手法の活用方法とその背後にある理論である。

時系列データを解析するための手法は、非常に多くのものがある。昨日から少しずつ読み進めていた書籍は、Rを用いて時系列データの将来予測をすることを目的に執筆されたものであり、この書籍で取り上げられているデータは、どれも金融に関するものである。

昨日も、書籍や論文のみならず、インターネット上でも時系列データの解析方法についてあれこれと検索をしていたが、計量経済学や金融工学の領域において、非線形ダイナミクスの手法を用いた時系列データの解析が盛んに用いられていることに改めて気づいた。計量経済学や金融工学は、私が日本の大学で学部時代を過ごしていた時の関心事項に当てはまるものであるため、昨日目を通してた書籍は、当時の私の関心を再び喚起するような役割を果たしていた。

興味深いことに、経済や金融の現象そのものにはもはやそれほど関心はないと思っていたのだが、それらの現象とそれらに付随するデータを解析することには、私の中で独特な喜びが引き起こされることに気づいた。もしかすると私は、人間の発達現象と同様に、経済や金融の現象が示す非線形的な「動き」そのものに魅せられているのかもしれない。ダイナミックに動く現象は、なぜだが私の関心を強く引き付ける。それは、そこに私が生命の躍動を見出し、それを感じているからなのかもしれ

ない。いずれにせよ、今日も愚直に、非線形的な動きを捉えるための研究を進めていきたいと思う。
2017/3/3

798. 能力の発達とエントロピー

先週から今週にかけて、そして来週はほぼ雨模様である。ただし、土日を目前にした今日の午前中だけは、非常に良い天気に恵まれた。フローニゲンという街は、オランダのほぼ北端に位置しており、ここはもはや北欧と位置付けても問題はないだろう。実際に、ノルウェーなどの北欧諸国は目と鼻の先にある。

薄暗い天候が続く冬の日々を過ごしながら思うのは、こうした気候条件は私の観想的な生活を支える上で不可欠なものになりつつあるということである。今文章を綴っているこの瞬間も、先ほどまでの晴天が嘘のように、薄い雲が空全体を覆っている。つくづく取り巻く環境は、精神に強い影響を及ぼすということを考えながら、天気が恵まれていた午前中にランニングに出かけて正解だったと思う。自宅を出発し、ノーダープラントソン公園に到着する頃から、自分の影と一体になるかのような観想的な意識を通じて、自分が走る足取りを一歩一歩前に進めていることに気づいた。

冬の穏やかな太陽光を浴びながら、そして、公園内に鳴り響く小鳥のさえずりを耳にしながら走るのは、実に爽快であった。ここでふと、午前中に目を通していた論文の内容を思い出した。それは、認知的発達と非線形ダイナミクスの手法である「再帰定量化解析（recurrence quantification analysis）」に関する論文である。その論文の前半部分では、複雑性科学に馴染みのない論文の読者に向けて、「自己組織化」と呼ばれる概念が丁寧に説明されている。

自己組織化という概念は、私たちの能力の発達という文脈において、既存の能力構造から新たな能力構造が生まれる現象を説明するために不可欠なものである。認識論者であり、発達心理学に大きな貢献を果たしたジャン・ピアジェの著作を読めば読むほど、複雑性科学の発想をピアジェが持っていたことが見て取れる。実際に、ピアジェの最大の関心事項は、発達段階モデルを創出することではなく、新たな段階が既存の段階からどのように生成されるのか、という点にあったと言っても過言ではない。ピアジェはこの問いに生涯にわたって取り組みながらも、残念ながらその問いに答

えることなく生涯を閉じた。しかし、現在の発達科学は、複雑性科学の恩恵を受け、徐々にピアジェが解決することのできなかった問いに対して説明ができるようになってきているのだ。

午前中に読んでいた論文では、自己組織化とエントロピー（システムにおける乱雑さの度合い）の関係性の観点から、認知的発達を説明している箇所が特に私の関心を引いた。簡単に述べると、認知能力にせよ、他の領域の能力にせよ、ある能力が新たな段階構造を生み出すためには、自己組織化という現象が起こる必要がある。そして、自己組織化とは、乱雑さから構造が生み出されることに他ならず、自己組織化が生み出されるためには、能力という一つのシステムの中に、ある程度の乱雑さが確保されておく必要があるのだ。

個人的に、これは体験的にとても納得のいく話だと思った。欧州で生活を始めて以降、人間発達に関する探究のギアを入れ替えることによって、毎日膨大な論文と専門書に目を通している。そのような作業によって獲得された情報は、何もしなければ、非常に乱雑なまま意識空間の中に格納される。文献調査を通じて得られた気づきなどを絶えず文章の形にしていくことによって、乱雑な情報が徐々に秩序立ったものに変化していくのを日々実感している。

実際には、文書を書くという秩序化の作業よりも、情報を取り入れる作業の方が絶対量が多い。こうした状態を継続していくと、文書を書くという秩序化とはまた次元の異なる秩序化が、自分の内側で起こることを経験することがある。それは、自分の知識の体系が自己組織化を経験し、新たな構造を生み出したことを示している。

日々の生活の中で、取り入れる知識項目を整理するために、現在のようにそれほど多くの文章を書くことを自らに課していない場合、単純に今日のようなランニングを行うという体を動かすことなどが、情報のエントロピーを整理し、自分の知識体系を秩序化させることに貢献しているように思えて仕方ない。実際に、ランニング後はいつも、自分の中で諸々のことが整理されているのを実感するのだ。頭を使うことに長けていない私にとって、身体を活用することはなくてはならないものである。
2017/3/3

799.「自己組織化」から見る燃え尽き症候群と過労死の問題

午前中の恵まれた天候のおかげで、ランニングに出かけることができた。ランニングから戻り、昼食を摂ったところで、再び午後の仕事に取り掛かった。もうそろそろ言葉にする必要がないほどに、淀みのない流れの中で仕事に没頭している自分が常態化しつつある。もはやそれ以外のことが、生活の中心を占めることは一切ないと言っても過言ではないだろう。人間の発達現象の考究に関する仕事が生活の中心点をなし、中心点から描かれる探究の円の中に、絶えず自分が置かれているような状況である。

午後一番に取り掛かっていたのは、以前「複雑性と人間発達」というコースの中で参考文献として取り上げられていた“Dynamics of Representational Change: Entropy, Action, and Cognition (2009)”という論文である。この論文が参考文献として取り上げられたのは、「再帰定量化解析」を扱ったクラスの時であったように記憶している。その時に、この論文を一読していたのだが、今日改めて読み返してみると、洞察に溢れる内容が多数記載されており、少々驚きを受けた。

表面的には、自己組織化という概念をより多角的に捉えることを促され、再帰定量化解析の原理に関する理解を促されたと言っていいだろう。しかし、そのような表面的なこと以上に、この論文を読むことを通じて、人間の発達に関して私がこれまで見逃していたような観点を獲得できたように感じたのだ。

この論文を読みながら感じていたことを備忘録を兼ねて書き留めておきたい。これはランニングに出かける直前に感じていたことと密接な関係を成している。私たちの能力という一つのシステムが新たな能力構造（段階）を生み出す際には、自己組織化という現象が必ず起こる。この自己組織化が起こるプロセスをより詳しく見ると、とても興味深いことに気づく。端的に述べると、システムが自己組織化を迎えるためには、システムが持つエントロピー（乱雑性）が増加する必要がある。

言い換えると、システムの構成要素の活動が増し、システム全体の不安定性が増加する必要があるのだ。そして、システムが不安定性の極致に到達することによって、次の構造が生み出される。すると、エントロピーは次第に減少し、システムが安定的な状態に落ち着いていくのだ。ここでポイント

になるのは、私たちの発達には、不可避的にエントロピーの増大が要求され、不安定性の極致を通過しなければならないということだ。

これはどのような小さな能力領域においても当てはまる。こうしたことを考えると、発達という現象が、いかに当人の心理システム全体を大きく揺るがすことになりかねないということが容易に分かるのではないだろうか。いかに小さな能力領域においても、それが新たな構造を生み出すためには、エントロピーの増大による不安定性の極致を経なければならないのだ。

ましてや、自我の発達領域という個人の実存性と密接に関わる領域の場合、発達という現象がいかに危険性を内包したものであるかが分かるのではないだろうか。私たちがこの世界に対して意味を付与する能力と密接に関係した自我というシステムが、新たな構造を生み出すというのは、不安定性の極致を通過するということなのだ。

数日前に私は、フローニンゲン大学での二年間の研究生活を終えた後、再び米国に戻るか、オランダで研究者としてもう一年ほど大学に残って働くかを再検討していた。仮にオランダに合計で三年間生活をすることにした場合、最後の年の滞在許可をどのように申請すればいいのかを、学生課にメールで尋ねた。連絡を取った相手は、私がフローニンゲン大学に来る前からお世話になっていたオランダ人女性である。一日経ってから届いたメールを読むと、彼女は燃え尽き症候群を患い、現在は別の課で働いているという内容だった。

私がフローニンゲン大学に来る際に、彼女は大きなサポートを私にしてくれていたため、その知らせは非常に残念であった。彼女の知らせを聞いた時、昨年の年末に日本に一時帰国していた際に、電通の過労死の事件をニュースで目にしたことを思い出した。燃え尽き症候群にせよ、過労死にせよ、それらは個人の内側において、自己システムが崩壊を迎えてしまったために引き起こされた現象だと思うのだ。

上記の話をもう一度振り返ると、システムが新たな構造を生み出すためには、システムのエントロピーが増大する必要がある。これは何を意味するかというと、ある種、システムに新たな投入量を投げ入れ、負荷をかけることを指す。そして、システムが新たな構造を真に生み出すためには、そうした負荷が不安定性の極致に到達する必要があるのだ。

© YOHEI KATO 2018

現在、日本で広まりつつある発達理論は、自己システムの中でも、特に実存性に深く関わる自我の発達領域を扱うものである。私が最も危惧をしているのは、システムが新たな構造に到達するためには、不安定性の極致に到達するまで投入量を上げていく必要があるという論理を逆手に取ることだ。

とりわけ、企業社会における人財育成において、こうした論理が逆手に利用される危険性が非常に高いように思われる。自我というシステムの成長を促すために、過度にエントロピーを増大させるような取り組みに従事させることは、燃え尽き症候群や過労死と同様に重大な「自我の崩壊」をもたらしかねない。企業社会の人財育成において、これは本当に避けなければならない問題だと思う。
2017/3/3

800. 出版から一年が経って思うこと

『なぜ部下とうまくいかないのか：自他変革の発達心理学』を出版してから、もう少しで一年ほど経つ。今私が非常に残念に思うのは、日本の実践者の間で、成人発達理論に関する探究と応用が進んでいないことである。私が本書に込めていた意図は、あくまでもこの書籍を入り口として、成人発達理論に関するさらなる探究と応用の土台が形成されていくことであった。一年という時間軸があまりにも短いことを考慮しなければならないが、私の意図は完全に失敗に終わっているように思う。

一体どれくらいの人が、入り口からその次のステップに向けて歩み出したのだろうか。具体的には、本書で紹介したロバート・キーガンの理論を入り口として、無数に存在する他の発達理論を自主的に学ぶことを、ほとんどの人はしていないのではないかと思えて仕方ない。

確かに、人間の発達を専門としない限り、専門書や論文を丹念に読むことはそれほど必要ないだろう。だが、仮にも発達理論を活用して何らかの実務活動に営もうとする者や、発達理論をより深く知ろうとする者にとって、なぜ単なる入り口でしかない本書や関連書籍──『なぜ人と組織はうまくいかないのか』『行動探究：個人・チーム・組織の変容をもたらすリーダーシップ』やケン・ウィルバーの翻訳書──に留まり続けているのかが不思議でならない。これらの書籍に記載されていることは、発達現象のごく一部でしかない。発達現象の複雑性や多様性を無視して、そのようなごくわずかな文献に頼ることは、発達理論を活用する実務や探究そのものの質を脆弱なものにさせる。

正直なところ、人間の知性や能力の発達を研究している者の中で、「意識の発達段階」という言葉は、死語になりつつある。また、ケン・ウィルバーの発達思想を母体としたインテグラルコミュニティーが用いる、特定の色での段階表記──オレンジやグリーン──や、「合理性段階」や「統合的段階（ビジョンロジック段階）」という呼び名、「慣習的段階」や「後慣習的段階」という呼び名を使っている研究者は、発達科学の世界においてもはや絶滅危惧種である。

確かに、それらの呼び名は、自我の発達領域や道徳性の発達領域に関するものであるため、自我や道徳性に関する研究を行っている者は、現在でもごく少数だがそれらの言葉を用いていることがある。ただし、それ以外の能力領域を説明する際には、そうした用語は妥当性が極めて低いのだ。そして何より、そうした言葉で人間の発達段階を表現することは、過度な一般化であり、極めて危険ですらある。特に、企業社会や教育の分野でそれらの呼称を用いることは、実践者を含め、関係者に大きな誤解を与えかねない。

発達理論を実務に応用しようとする者にとって、そうした安易な呼称は避けなければならないし、現在日本で手に入る書籍を入り口として、他の発達理論を学んでいく必要が大いにあるだろう。そうした先に、現在日本で広まりつつある発達理論を客体化することが初めて可能になり、人間の発達に関してより慎重かつ意味のある議論を進めていくことができると思うのだ。そうすることによって、徐々に発達理論が真の意味で多様な実務領域に貢献し始めるのではないかと思う。

音楽評論家の吉田秀和氏が、生前に書き残した評論の数は膨大な量にわたることを少し前に知った。吉田氏は、当時の日本人の発想の枠組みや生き方に対して問題意識を持ち、音楽評論を通じて、それらを変容させていく仕事に生涯を捧げていたことも知った。

吉田氏が亡くなる直前に、「自分が評論をこれだけ書いても、結局日本人は何も変わらなかった」という言葉を残したそうであり、それでも吉田氏が評論を死ぬまで書き続けた姿勢に、私は胸を打たれた。発達理論を取り巻く日本の現状が何ら進展を見せることがなかったとしても、私は書き続けたいと思う。書き続けることの先にある意味を信じて、今日も自分の仕事に取り組みたい。2017/3/3